

視覚障害者が拓くセクシュアリティ

皆 川 あかり*

People with Visual Disabilities Lead Renewed Sexuality

MINAGAWA Akari

Abstract

In recent years, there has been active discussion of the sexuality of people with disabilities. Through these discussions, the issues of the rights and support for people with mental and physical disabilities in terms of sex is often mentioned, and the sexual individuality of people with disabilities is seen as being very important. However, there have been very few studies on people with visual disabilities, and there have been no detailed examinations carried out on the sexuality of such people.

Therefore, this paper will clarify how the sexuality of people with visual disability is formed and what kind of practice is carried out, by holding interviews with relevant parties. Although it is true that people with visual disabilities face difficulties when they are expected to be the same as non-disabled people, this paper shows how a new sexuality, led by senses other than vision, should be, and shows the possibility of getting over the limits of sexuality of non-disabled people.

Keyword : visual disability, gender, sexuality, norm, body sense

1. はじめに ー本研究の目的と視座、方法ー

近年、「障害者の性」に関して障害者運動における当事者からの主張や、ジェンダー・セクシュアリティの観点からの研究が行なわれている。それまでは、障害者は介助やケアという側面から、あるいは優生学的見地から生殖から分離され、「無性の存在」と見なされ、自ら性を口にすることもできなかった（谷口：1998）。同時に、障害者の性を危険なもの・厄介なものとして排除するという意図から、強制的な不妊手術や人工中絶手術が行われ、性に対する抑圧が行われてきた。このように障害者は「無性の存在」と規定されながらも、優生学やケアの論理と結びついて、抑制され管理されなければならない対象として常に注視されてきたのである（倉本：2002）。そのような非障害者の視線に対し、当事者からは障害者も非障害者と同様に性的主体であるという主張がなされている⁽¹⁾。しかし、障害者が非障害者と同じ性的主体として承認されるには、非障害者を基準とするセクシュアリティ規範を受容し、非障害者の〈男/女〉へ同一化することを求められる。そうでなければ、「逸脱」や「劣る」と捉えられてしまうからだ。しかし物理的にも社会的にも非障害者へ同一化することは困難があるため「2流」の〈男/女〉だと見なされ、障害者は自己否定という葛藤を抱え込んでしまう（倉本：2002）という指摘もある。

障害者の性に関する先行研究では、福祉の現場や障害者運動、障害学の立場などから問題提起が行われている。たとえば、障害者に対する「避妊/去勢手術」をめぐる障害者運動動向の研究⁽²⁾、あるいは福祉現場における問題の考察などが挙げられる⁽³⁾。一方、視覚障害に関する研究蓄積はきわめて少ない。特に視覚障害者人口が少数⁽⁴⁾である事に加え、性的実践において身体動作にさほど制約がないと考えられているため問題化されにくいのであ

キーワード：視覚障害、ジェンダー、セクシュアリティ、規範、身体感覚

*平成21年度生 ジェンダー学際研究専攻

ろう。また情報の授受に困難があるという面から、性に関する情報や知識の伝達がどう行われているかという、性教育やメディア論における研究はあるが⁽⁵⁾、視覚障害者が自らのセクシュアリティをどう捉え、性的実践が行われるのか、という当事者の実態は明らかになっていない。

そこで本稿では、視覚障害者が非障害者を基準とするセクシュアリティ規範をどのように受け止め、その中で自らのセクシュアリティをどう捉えているのかという点を検討し、視覚障害者のセクシュアリティのありようの一端を提示することを目的とする。

研究方法は、質的調査として視覚障害者にインタビュー調査を行った。本研究では視覚障害者のセクシュアリティのありようを当事者自身の語りから描き出すことに重きを置くため、ライフストーリー・インタビューの手法を採った。ライフストーリー・インタビューは、「個人が生活史上で体験した出来事やその経験についての語り」を引き出す研究方法であり、「それによって自己概念や自己と社会の関係のあり方」を捉えることができる手法であるため（桜井：2002）、本研究のアプローチとして有効であると思われる。

男性4名、女性4名の計8名にインタビューを行った。調査協力者のプロフィールは以下の表に記した。調査地は東京近辺、調査実施期間は2008年6月～2009年8月まで、一回につき2時間強、2～3回にわたって実施した。なお、スクリプトにおいて*印は調査者を、調査協力者はイニシャルで示している。括弧内は文脈を明らかにするため調査者が補足した。

また、本調査はセクシュアリティに関する質問であるため、調査者との間にラポールを築くことが非常に難しく、極めて限定された条件の中で調査協力者を探さねばならなかった。そのため調査者が教育実習や授業見学をした特別支援学校の教諭から卒業生を紹介してもらい、又は、調査者が視覚障害スポーツに参加し、チームメンバーに調査依頼をし、さらに知り合いを紹介してもらいスノーボールサンプリングによって調査協力者を探した。その結果、若年層が中心になったことや男性の先天盲がない等、偏りが生じている。そのため本調査結果を全ての視覚障害者に一般化することはできず、今回の調査協力者における限定的な分析になることを断っておきたい。

表) 調査協力者プロフィール一覧

	性別	年齢	出身	障害の程度・見え方(注)	教育歴・職業など
A	男	20代 半ば	九州	光覚：幼少期はある程度視力があつたが、小学生になる頃には手動弁に、成人時には光覚程度の視力に低下した。	小学校は地域の盲学校。中高は都内の盲学校に進学。地元の大学で教員免許を取得したが採用されず、盲学校専攻科の鍼灸科に進学した。
N	男	20代 前半	関東	左眼：幼少期に摘出し、義眼を使用。右眼：小学低学年まで0.03あつた視力が低下し、現在は手動弁程度。	小学～高等部専攻科まで盲学校。鍼灸按摩マッサージ師の資格を取得し、治療院に就職した。
H	男	20代 半ば	中部	弱視：中学生で病気が発症し、現在視力0.05と0.01。中心視野に暗点があり、周辺視野で物の動きや形を判別している。	中学まで普通校に通う。高校から盲学校に。専攻科で鍼灸按摩マッサージ師の資格取得し、現在はヘルスキーパーに。 ⁽⁶⁾
B	男	10代 後半	中部	先天性弱視：視力0.05程度。活字を読む事や、一人で歩行が可能。	小中は普通校の弱視学級に。都内盲学校高等部へ進学の後、大学（法学部）進学。
Y	女	20代 前半	近畿	全盲：2才で両眼を摘出し、義眼を使用。「見た」記憶がない。	地域の盲学校小学部へ入学し、中学から都内の盲学校へ。大学卒業後、一般企業に就職。
M	女	20代 前半	関東	全盲：2才で片眼を摘出、片眼は温存しているが全盲である。「見た」記憶がない。	都内の盲学校に小学部から、高等部まで通い、大学では福祉を専攻している。
E	女	40代 半ば	関東	手動弁：幼少期から視力は同じまま。明るさや物の大きさはぼんやり把握出来る。	小～高まで都内盲学校。大学では文学専攻し、卒業後結婚し、出産。育児と作家活動を続けてきた。
K	女	30代 半ば	関東	右眼：視力0.08で、中心視野に暗点がある。左眼：視野がほとんど無い。そのため、右眼で見ている。1m以内の人の表情は読み取れる。	中学まで普通校に。高校から盲学校に通う。鍼灸按摩マッサージ師の資格を取得し、現在ヘルスキーパーである。婚約者と同居し、結婚の準備を進めている。

(注) 測定できる視力の最小値は0.01である。それより低い場合の区分は、眼前の指の数が把握できる程度の「指数弁」、その次に眼前で振られた手の動きが把握できる程度の「手動弁」、明暗のみ把握できる「光覚（明暗弁）」、まったく視覚のない「盲」という区分になっている（芝田：2007）。

2. 非障害者への同一化による「困難さ」

2-1 「見る」セクシュアリティへの同一化

男性の視覚障害者にとって、非障害者男性を基準とするセクシュアリティ規範はどのような影響があるのだろうか。男性視覚障害者による性的欲望についての語りから考察したい。

性に関する情報や知識の入手法を質問したところ、Aさんを除く男性3名は、主にアダルトビデオ（AV）などの映像のあるメディアから得たと答えた。小学生まで視覚経験があるNさんは、「性行為の手順」を覚えたり、性的欲望を喚起するようなセクシャル・ファンタジーを主にAVから得たという。

*：ビデオですか？ AVって見えづらくないですか。

N：いや、画面に近づいたら、見えますよ。相当目が痛いんですけどね。連続で何時間もは見れないです。

*：AVが一番いいですか？ 他に媒体ってそんなにないとは思うんですけど、官能小説とか、（他にも）あると思うんですが。

N：まあ、一番AVがいいかな。映像があるから。

*：映像って大切なんですね。

N：大切です。

*：声だけっていうのは・・・

N：いや、映像があったほうがいいですよ。声だけじゃねえ・・・本読む人もいますけど、本じゃあねえ、って。

Nさんが初めてAVを見たのは小学生の頃、父親のビデオを偶然再生してしまったことがきっかけだった。当時は視力も現在より良かったので、人物や動きを見ることはできたが、何をしているのかよく分からなかったという。自ら性的な興味を持ってAVを見たのは、視力が下がり始めた小学5年生になってからである。

現在のNさんの視力では、人物のシルエットはぼんやり把握することはできるが、細かな動作や表情などは識別することができないため、日常生活では主に声の特徴や体型のみで人を識別している。であるにもかかわらず、NさんはAVの音声だけではなく、自分の目で「見る」映像にこそ価値を感じている。

また、20代男性のHさんは中学2年まで視力が良かったこともあり、思春期にはAVなどを見ていたという。Hさんは、小学生の時アニメの女性主人公の全裸のシルエット画を見て性的興奮を覚えたのがきっかけとなり、女性の裸を見たいという欲望を抱くようになった。ただ、Hさんは女性の身体を「見てはいけないもの」として神聖化して捉えており、「見てはいけないもの」を「見る」ことに性的な興奮を覚えるという。中学時代に友人達とポルノ雑誌やAVも何度か観たが、モザイクを入れない無修正ビデオを観たときには「気持ち悪い」と幻滅したと語る。Hさんにとって、女性の身体を「詳らかに見る」ことが重要なのではなく、「見てはいけないものを見る」という行為こそが「神聖なものを犯す」という性的快感を得る重要なファクターになっていると考えられる。

Hさんは普通校で9年間過ごしており、現在も一定の視力があるため、非障害者のセクシュアリティの影響を受けており、性的欲望と「見る」という行為は結びついていると考えられる。点字使用者であり白杖を使用しているNさんは、周囲から「全盲」とみみなされがちではあるが、小学校時代の通学電車の中で、女子高生のミニスカートから出ている足を性的関心から盗み見していたなど、視覚を通して性的な刺激を受けていた経験から、現在でもセクシュアリティと「見る」行為は切り離せないものとなっている。

HさんやNさんにとって、「見え方」はさして問題にならず、「見る」行為自体が重要な意味を持っている。Nさんは、ほとんど視力はないが「見たい」と欲望している。この「女性の身体をまなざす行為」は、AVやポルノグラフィを楽しむという非障害者男性のセクシュアリティへの同一化であり、「まなざすこと」は非障害者男性と同じ「欲望する性的主体」としての「男」であることを証明することにもなる。

しかし、非障害者男性のセクシュアリティへの同一化が行われることで「困難」に直面することもある。特に男性が女性に対し、性の主導権を持たなければならないという性役割を果たすことにプレッシャーを感じるという「困難さ」である。

10代男性のBさんは高校以降、クラスメートや後輩の視覚障害のある女性と交際していた。彼がデートをする際に困るのは、「一応男がリードするじゃないですか。道が分からない時とか、どっちに曲がるんだー」と焦ってしまうことだという。それは彼女に「目的地にすんなりたどり着けないと、頼りない彼氏だなんて」「だせえなんて。そういう風に思われたくない」からである。このようにBさんは、男性が主導権を持ちリードしなければならないと考えており、その規範から逸脱してしまうことを恐れている。

一方、Nさんは、これまで自分よりも視力のよい弱視の女性と付き合ってきた。

N：物を探すとか場所を探すには、向こうに全部やらしてもらわなきゃいけないし、何か物を見てももらわなきゃいけないので、負担をかけてる面で、やっぱり自分が見えていれば負担は減るのにな、って考えはあります。どこに行くにも、自分が案内はできないので、向こうに全てを探してもらったりとか、案内できる場所もあるんですけど、やらしてもらわなきゃいけないんで、なんか・・・任せてばっかじゃ情けねえなって思います。

*：でも、相手の方はあまり気にしていない？

N：気にしてないですけど、向こうが気にしてなくても、俺自身が気にしちゃうんで。

*：自分が好かれる時にそういうこと（相手が晴眼か全盲か弱視か）は気になりますか？

N：いや、向こうに迷惑がかかるかな、とは思いますが。負担、普通の晴眼者と付き合いよりも負担がでかくなるので、確実にそれは言えるので、その辺がいいのかなって思います。

*：今の彼女さんや前の彼女さんは弱視の方ですけど、そう感じた事はあるんですか。

N：常にありますよ。何かしらと手引きしてもらわなきゃいけないし、どこ行くにも何か見つけてもらわなきゃいけないし。（そういうことは）ありますけど。そういう、向こうに負担をかけているな、とか向こうに大変な思いをさせているなって思いを感じる事もしょっちゅうです。

*：うーん、そういう不安みたいなのを抱えていることを、どうやって解消しますか。

N：あー、向こうに言います。で、1回、2回かな、号泣したことあるんで、目の前で。俺が。「どうも、すんません」って号泣したことあります。

Nさんは現在、鍼灸・按摩マッサージ指圧師として安定した就労環境にいるため、経済的な不安について語られることはなかった。また、いわゆる「男らしい」身体特徴を自慢に感じており、これらの点では「男」として引け目を感じることはないが、視力の面で相手の女性に頼らざるを得ない場面が多いため、相手に対して負い目を感じてしまうのである。

Nさんは日常生活における移動など人に頼らざるを得ないことが多々あり、それを「不便」と感じるという。また、職場でも「周り（晴眼の同僚）が掃除とかしていても、自分は何もできないんで申し訳ない」と感じる。Nさんのように、障害ゆえに周囲の人間に負担をかけてしまうことに負い目を感じてしまう場合も多々ある。非障害者が中心の社会において、障害ゆえ「できない」ことがあるために、自分は「何もできない」存在であると自己否定に向かわされてしまうのである。

このように、男性障害者は日常生活において「負担をかける者」というネガティブな障害者像へ回収されてしまうと同時に、セクシュアリティに関しても非障害者男性への同一化の過程で、男性の性役割を担いきれない、あるいはパートナーに負担をかける事態に直面すると、「頼りない/情けない男」という否定的な評価をされてしまいかねない。さらには「できない＝情けない男」という否定のまなざしを自らに向けねばならない葛藤を抱えてしまう。この過程で、ネガティブに意味づけられた障害者像の内面化を再強化してしまう。

2-2 「女」への同一化における二重規範

それでは、女性視覚障害者にとって、非障害者女性のセクシュアリティ規範はどのように作用しているのだろうか。20代で未婚女性である全盲のYさん、Mさんは性的経験が少ないため、性的実践やマスターベーションの方法などの実践に関わる情報や知識が少なく、情報取得にも消極的で、自らの性的欲望を表現することにためらいや恥ずかしさを感じていた。性に関する情報源には主に映画や小説、性教育専門書が挙がり、その多くはストーリー中の描写や活字媒体を通じた解説であり、AVやポルノグラフィのような視覚的な描写は敬遠されてい

る。しかし、映画や小説は一部始終を描いているわけではないので、実際どのように行われているかなどの具体的なイメージは湧かないという。しかし、Yさんは「女の人って任せておけばいい」ので「どうにかなる」と考えており、性に関して女性は受動的でリードされるものというセクシュアリティ規範の受容が見られる。

30代半ばの女性のKさんは盲学校高等部で出会った先輩と交際を始め、初めて性行為を経験した。

*：(性行為について) 何で知りました？

K：なんだろう、・・・雑誌とかかな。

*：雑誌やテレビだと、実際何をしているのかって、ぼかして分らないくないですか。

K：あ、うん。だから、初めてのときにびっくりしたんです。え、無理でしょって。(中略)

*：Kさんは最初する前に(避妊方法など)知っていましたか。

K：教えてもらった、彼に。もう、教育者。すごい教育された。ゴムの付け方とか。性交の流れとか。こうやるんだよ、こうやるんだよって。教えてもらった気がする。何かね、自分の理想に近づきたい人だったから、すごい要望が多かった。服はこういうのがいいよとか、要求が強い。性的なことだけ、それ以外のことも、自分の理想にしようとして。どんどん自分が変わって行っちゃうのが嫌だった。

Kさんは、性に関する知識や情報が少なく、どうしていいか分からなかったため、年上の彼に主導権を委ねざるを得ず、強引な彼の思いのままに誘導されてしまった。Kさんは性において「受動的であれ」という女性のセクシュアリティ規範を受容し内面化していたことで、二人の間に力関係が生じ、相手の意向に背くことができず、結果として「自分を変えられてしまう」という辛い経験をしてしまった。現在のパートナーとは互いの意志を尊重し合える仲で、性的実践においても嫌な事があればすぐ話合うことができるが、その一方でKさんは自分の性的欲望だけは表現できずにいる。

K：私は(求める事が)できなくて、相手が求めてくるのを待っている。自分からは言えた事がない。

*：それは恥ずかしいから？

K：うーん、なんか、言い出すのは恥ずかしいし、そういう、二人の中で自分から言うキャラじゃないというか、どうしたのって思われる。そんな恥ずかしい仲間じゃないのに、恥ずかしい。

*：自分のキャラってどういうものですか。

K：性的にドライになっているかな。(中略) 自分はそういうことが好きじゃないんだっていう固定観念があった。そうじゃないのかもしれないけれど、そう思い込んでる。

Kさんは、自分は性的に積極的ではない、好きではないという固定観念に囚われており、自分の中で高まる性的欲望に戸惑ってしまう。しかし、女性から求めることは恥ずかしいことであるというセクシュアリティ規範と自らの欲望との間で逡巡し、結局我慢を強いられるという状況に陥ってしまうのである。このようにKさんは、非障害者女性を基準とするセクシュアリティに同一化していく過程で、その規範により、自らの性的欲望を抑圧してしまうのである。

今回の女性視覚障害者へのインタビューでは、非障害者女性への同一化における困難や苦労はほとんど語られていない。4名中3名の調査協力者が未婚で家事や出産、育児等の再生産役割に従事していないことに加え、10～20代女性の2名は、性的実践経験がなかったことからセクシュアリティ規範との齟齬を直に感じる場面が少なかったこともあるだろう。

しかし、むしろ障害の有無に関わらず、そもそも女性はセクシュアリティ規範によって性的に受動的であること、あるいは男性に従順であることを要請されており、女性障害者がその規範をそのまま内面化してしまう場合も少なくない。Kさんのように女性視覚障害者においては、障害者に対する性的なものへの抑圧に加え、女性に対する性規範からくる抑圧という二重の抑圧が相互補完的に働いていると考えられる。したがって、女性視覚障害者が性的抑圧から解放され、性的主体となるためには、非障害者を基準とするセクシュアリティ規範自体からの解放を目指さなければならないのである。

3. 身体感覚から導かれるセクシュアリティ

それでは、非障害者を基準とするセクシュアリティ規範からいかに解放されうるのだろうか。

これまで見てきたように、非障害者を基準とするジェンダー/セクシュアリティ規範が視覚障害者にも強く作用し、非障害者の「男/女」へ同一化がなされていた。しかしその一方で、性的実践において、見えない/見えにくい生活の中で培われた、視覚以外の身体感覚が活用されていることも同時に語られる。ここでは非障害者を基準とするセクシュアリティ規範を受容するだけではない、視覚以外の感覚やコミュニケーション方法から導かれるセクシュアリティのありようを見ていくことにしたい。

3-1 「触れあう」身体感覚

視覚障害者は、他者との間の身体距離が比較的近く、パーソナルスペース⁽⁷⁾が小さくなる傾向がある。他者との距離感は視覚、聴覚、嗅覚などの身体感覚から測られており、視覚障害者は主に視覚以外の聴覚、嗅覚、肌の感覚など、他の身体感覚から距離を掴んでいる。しかし聴覚以外の感覚は、親密な関係性において取られる距離まで近づかなければ知覚できない。したがって視覚的な知覚がない状況においては、パーソナルスペースは収縮する傾向がある。また、他者との距離の取り方は、文化的に獲得される。視覚障害者は、介助者の腕に掴まって歩く「手引き」などの介助を通し、他者と身体接触が多い環境で生活していることに加え、事物を認知するために普段から「触察」⁽⁸⁾を行い、物体の形状や環境を認識する際に触覚を多用していることなどから、他者との身体接触にも親和的である。そのような環境下にいる視覚障害者にとって、他者との距離の取り方や他者に触れることは、どのような意味を持つのだろうか。

20代女性のYさんは小学校時代、同じ寮に住む盲学校高等部の男子生徒に憧れ、よく彼のひざに乗って、手を握りながら話をしていたという。また、中学時代には、好きな人と「点筆（点字用筆記具）を取り合ってじゃれあって」いた。好きな男性との「スキンシップがすごい好き」と語るYさんにとって、他者の身体に触れることは、相手への好意を表現し感じあう愛情表現である。

Eさんは40代半ばの既婚女性で、非障害者の夫と娘の3人家族である。文学を愛好する祖父の影響を受け、高校時代に作家としてデビューし、大学時代に出会った現在の夫と結婚し、出産・育児を経ながら、創作活動を続けている。Eさんは、作品に表現する際に心がけている事がある。以前Eさんは、吉本ばななや綿矢りさの作品を読み、「温度のない文体」だと感じたという。

E：引いた見方というか、対象に斬り込まないというか。たまたまその作品がそうだったかもしれないけれど。私は、自分は書くのも読むのもそうじゃないので。五感で感じる文章が好きなのね。文章も、短文も。箱の外から見ている感じだなーって思ったの。ガラス越しに見ているというか。

*：画面を通してって感じですね。

E：そう、だから直にそのものと接触していないって。

Eさんは、視力だけでは物の識別は難しいため、対象に直に触れたり肌で温度を感じながら対象と向き合い、現実そこに存在の確かさを実感している。存在感をリアルに描くため、触覚や肌の感覚で感じたことを意識して作品を作りあげている。そのため、対象を遠巻きに眺めるような「温度のない文体」にはリアリティを感じられないのである。このような彼女の研ぎ澄まされた感覚は、性的実践においても発揮されている。Eさんは性の喜びや心地よさをパートナーとの「一体感」のなかに見出しているという。

*：性の中でこれが一番いいと言える事ってなんですか。

E：えー、・・・やっぱり相手とつながった瞬間ということかな。それがもしかしたら、その、自分にとっての始まりみたいな感じ。(中略) 変な話、『失樂園』ってある意味分かるんですよ。あれはもしかしたら、理想の形というか。自然の生まれに任せていたら、絶対どっか先に死んじゃうじゃない。せっかくだったら、別々に生まれてきたんだけど、命を終えるのは一緒がいいのかなと思っていて。だからどっかでそういう

ことを求めているんだと思うんです。だから多分私は一体感というのを求めているんだと思うんですよね。私の短歌で、「一体の感じを何と言えがいい？ たとえばミルフィーユの層の渾然」っていう歌を10年前くらいに詠んだんですが、私は今もそう思っているんですね。

*：渾然とは？

E：層が一体化しているじゃないですか。きれいに一枚ずつはがしていけば何層って分かれるかもしれないけれど、瞬間捉えた感じ、ミルフィーユって色んなものがつながっているなって感じするでしょう。

ミルフィーユは幾層も薄い膜が折り重なり合っている。一見ただけでは、層の一つ一つは独立したまま、順序正しく重ねられているように見える。しかし、一度口に入れてしまえば、上の層と下の層が混ざり合い、これは元々上の層なのか下の層なのかなど、判別がつかなくなる。ここで詠われている「一体感」とは、互いの肌に触れ合いつながっている瞬間、普段は個々の時間、空間をそれぞれに生きている身体の境界が重なり、渾然と融合して分けることができなくなる感覚である。その瞬間をきっかけにして、個々の身体、時間、精神が溶け合っていき、互いが一つになれるという。Eさんは「一体感」の喜びを詠う一方で、失う怖さをも同時に抱いている。普段は別々の存在である愛する者を失い、バラバラになることを怖れているが、だからこそ「一体」になれる瞬間は、Eさんにとって性的な喜びとともに安心感をもたらすのである。

全盲のYさんやEさんのように、視覚経験の少ない視覚障害者にとっては、肌と肌の触れ合う感触を通すことで、他者の存在を最も確かに実感できるのである。それがパートナーとの親密さや好意を表現する方法でもあり、また、性的な喜びや充足感にもつながっている。ここには、「見る/見られる」ことに重きを置くセクシュアリティとは異なる「触れあう」セクシュアリティのありようを見いだす事が出来よう。

3-2 コミュニケーションの多様さ

性的実践において相手との意思疎通を図る際、表情や身振りなどの視覚的な表現方法では視覚障害者にとって互いの意思が伝わりにくい。そのため、相手の感覚や感情を読み取ったり、自分の感情を伝えるために、他の身体感覚や表現方法を積極的に活用している。弱視であるHさんとKさんは、パートナーの様子や感覚を、主に身体の変化や声から読み取っているという。Hさんに性的実践の中ではどのようにコミュニケーションを取っているか尋ねると「反応ですね。それは間違いなく。たとえば、そのせい液（女性の膈内に分泌する体液を示す）、濡れ度とか、筋肉がきゅっと収縮する感じ」という。このようにHさんは、パートナーの様子を主に体の反応や声から推し量っている。時折会話を挟んだり、別の機会に話し合うこともあるが、回数を重ねることで徐々にパートナーの感覚を掴んでいった。Hさんは、「ここがいいのかな」というようにパートナーの身体反応を具体的に捉え、相手の反応や感覚をつかもうとしている。

一方、弱視の女性であるKさんも性的実践においては、言語コミュニケーションに加え、触覚や音を重用している。自分が嫌なことは言葉にして伝えるが、相手の感覚を理解するために、相手の「表情は見えない」ため、「体動」や声にならない「息遣い」などの身体の反応を見ているという。上述の2人の職はヘルスキーパーであり、その職業柄、筋肉の動きなど身体構造に精通しており、施術では身体に触れながら体の調子を読み取るため、身体の変化や反応に非常に敏感であると考えられる。視覚に頼らない生活で培った身体感覚を活かして性的コミュニケーションを取っていることがうかがえる。

一方、全盲のEさん、Nさんは性的実践において積極的に言葉を交わしているという。Eさんは、日常生活の中でも言葉にして伝え合うように心がけている。Eさん自身、詩人という言葉を抱う仕事柄、言葉に対して真摯であり、Eさんの夫も、「アイコンタクトができないから、言わなきゃ伝わらない」と考えている。それゆえEさん夫婦は、日常的にコミュニケーションが取れていれば、性的実践においても円滑に意思疎通できると確信し、互いに何でも言葉にするよう実践している。Eさんは性的実践においてパートナーがかける言葉の中に「相手への気遣いや愛情」を感じ取ることができ、その言葉が性的な喜びをもたらしてくれるのだという。

また、Nさんは、普段の生活からパートナーと言語コミュニケーションを積極的に取ることで、性的な場面においても言葉を交わして互いの意思を確認し合うようにしていると語る。Nさんはパートナーとの言語コミュニケーションを重要視している。

*：相手の方がどう思っているか、気持ちいいと思っているのかとか、これは嫌だと思っているというのはどのように知るんですか。

N：向こうが言ってくれるまで（聞いて）。

*：やっぱり最初の頃って言いにくかったと思うんですが。

N：手探り状態です。

*：そういう風に言ってくれるようになって、分かったこととか変わったことってありますか？

N：いやー、わかったこと・・・あんま力入ると痛がるというのが分かったんで、力を入れてないです。多分。
（中略）

*：相手の反応のどこに、心ひかれるんですか？

N：気持ちいいって言ってくれることですかね。

*：それは、どんな感じでコミュニケーションを取っているんですか？

N：聞く。で、反応、返ってきた返事とで。聞かなきゃ何も言わないので。

Nさんは、口数の多い性格ではなく、このインタビューでも言葉を探しながら、必要以上に饒舌になることはなかった。パートナーとの性的実践で積極的に言語によるコミュニケーションを図るのは、細やかな視覚情報がほとんど得られないため、話し合わなければ相手の反応が掴めないからこそであろう。普段から、弱視である彼女に対して負い目を感じてしまうNさんだが、「気持ちいい」という言葉を引き出せば、性的な喜びを女性に与えることのできる「男」としての喜びや自信にもつながる。そのため、Nさんにとっては、彼女を満足させ自分も満たされるためには、言語によるコミュニケーションでの意思確認が欠かせないのである。

このように、視覚以外の身体感覚や言語コミュニケーションを工夫して活用し、「見る」だけでは感じ取ることのできない方法でパートナーと緊密なコミュニケーションを図り、そこから性的快感や喜びを得ることができると。彼ら/彼女らのセクシュアリティのあり様は、障害の程度によるものだけではなく、視覚経験の有無、パートナーとの関係性やジェンダーという要因が折り重なり合って形成されており、さながら「ミルフィーユ」の層のように渾然と多様に広がっている。

4. おわりに ー非障害者のセクシュアリティ規範を超えるー

これまで見てきたように、視覚障害者である調査協力者たちのセクシュアリティのありようは、非障害者を基準とするセクシュアリティ規範と決して無縁ではなく、その規範からの要請を受け、内面化しているという側面があった。特に視覚経験がある男性視覚障害者の場合、「見る」行為を通して非障害者への同一化がなされているが、障害ゆえに「できない」ことがあるため、「頼りない男」とみなされてしまうという不安や葛藤をも同時に抱えてしまう人も見られた。一方、女性視覚障害者においては、非障害者女性に同一化したとしても、さらに女性のセクシュアリティ規範によって縛られるという二重の抑圧を受けてしまうことも明らかになった。

しかし同時に、視覚障害者によるセクシュアリティをめぐる語りは、非障害者のセクシュアリティに収まらない多様さをも示すものでもあった。特に視覚経験の少ない人ほど、性的実践において、触覚を多用した触れ合いや言語コミュニケーションの重用など、視覚に頼らない生活の中で培った他の身体感覚の活用やコミュニケーション方法の工夫を行っている。彼ら/彼女らの実践からは、身体感覚を活用した多様な性的コミュニケーションによって、既存の視覚に偏重しがちな非障害者のセクシュアリティ規範を乗り越え、自らの身体や身体感覚を通じて多様な感じ方や関係性を結ぶことのできる、新たなセクシュアリティを見いだせよう。さらに、このことは単に視覚障害者にとって有用だけでなく、「見えている」ことで分かったつもりになってしまう非障害者のセクシュアリティ形成に対しても新たなアプローチとなるだろう。

このように本調査では、視覚障害者のセクシュアリティのありようの一端を示すことができたが、今後はさらに調査を進め、セクシュアリティ形成において触覚などの身体感覚がいかに作用しているかを検討するとともに、視覚障害者のセクシュアリティから示された「視覚以外の身体感覚の活用」や「コミュニケーション方法」を、セクシュアリティ形成の場において、いかに活用できるか検討していくことが課題である。

【註】

- (1) 『障害者が恋愛と性を語りはじめた』(1994) や、安積 (1993) 熊篠 (2001) のなどの障害者自身の性や恋愛をめぐる手記やエッセーが発表されている。
- (2) 瀬山 (2002、2005) は、1970年以降、障害者運動の中で「子宮摘出手術」の問題化や結婚・子育てをめぐる議論が展開されてきた経緯を分析している。
- (3) 草山 (2005) はマスターベーションなど性の介助について介助者の語りから検討している。前田 (2005) は男性同士の介助において身体接触とセクシュアリティの問題を介助者、障害者両者のインタビューから考察している。
- (4) 視覚障害者 (児) 人口は2006年度調査では、約30万人である。障害者人口総数が約1069万人に対し、視覚障害者は2.9%にとどまる。(障害者白書：2006)
- (5) 佐藤 (佐久間) (2005、2007) は主に視覚障害者 (児) への性情報の伝達について、野原ら (2004) は、性的被害予防の観点から、特別支援学校 (盲学校) における性教育のあり方を考察している。
- (6) ヘルスキーパー (企業内理療師) とは、企業等に雇用され、その従業員等を対象にして施術等を行う理療の国家資格 (鍼灸・按摩マッサージ指圧) を持つ者の呼称である。
- (7) E・ホール (1970) によれば、人と人との間の快適な距離は、その二者間の関係性と関連している。個人的に親密であれば、二者間の距離は狭まる。したがって、相手との距離の取り方で相手への信頼や不信を表明することができる非言語コミュニケーションの一つである。R・ソマー (1972) は、侵入者が入れないように、その人の身体を取り囲む、見えない境界をもった領域、持ち運びのできるテリトリーであり、自我の境界であると捉えられている。
- (8) 「触察」とは、触覚を利用して物体を観察することを指し、手指による触察、足底による触察、白杖やその他の物体を解した触察がある [芝田：2007]。

【参考文献】

- 安積遊歩 (1993) 『癒しのセクシー・トリップ わたしは車イスの私が好き!』 太郎次郎社
 エドワード・ホール著 日高敏隆・佐藤信行訳 (1970) 『かくれた次元』 みすず書房
 草山太郎 (2005) 「介助と秘め事—マスターベーション介助をめぐる介助者の語り」 倉本智明編著『セクシュアリティの障害学』 明石書店：209-229
 熊篠慶彦 (2001) 『たった5センチのハードル』 ワニブックス
 倉本智明 (2002) 「欲望する、<男>になる」 石川准・倉本智明『障害学の主張』 明石書店：119-144
 桜井厚 (2002) 『インタビューの社会学』 せりか書房
 佐藤 (佐久間) りか (2005) 「視覚情報とセクシュアリティ —盲学校の性教育が語るもの—」 『F - GENS Vol.6』 お茶の水女子大学21世紀プログラム「ジェンダー研究のフロンティア」：77-81
 — (2007) 「視覚情報とセクシュアリティ —視覚障害者の性概念形成過程に学ぶ—」 『女性学研究Women's study review』 14号 大阪府立大学女性研究センター：52-76
 芝田裕一 (2007) 『視覚障害児・者の理解と支援』 北大路書房
 障害者の生と性の研究会 (1994) 『障害者が恋愛と性を語りはじめた』 かもがわ出版
 瀬山紀子 (2002) 「声を生み出すこと—女性障害者運動の軌跡」 石川准 倉本智明編著『障害学の主張』 明石書店：145-173
 — (2005) 「障害当事者運動はどのように性を問題化してきたか」 倉本智明編著『セクシュアリティの障害学』 明石書店：126-167
 谷口明弘編著 (1998) 『障害をもつ人たちの性—性のノーマライゼーションをめざして』 明石書店
 内閣府編『障害者白書 (平成18年度版)』 2006
 野原ひでの、下西さや子、浅野千恵 (2004) 「視覚しょうがい児を対象にした性被害予防教育に関する一考察 —アンケート調査による全国盲学校における性教育・性被害予防教育の現状—」 『吉備国際大学社会福祉学部研究紀要』 第9号：77-84
 前田拓也 「パンツ一枚の攻防 介助現場における身体距離とセクシュアリティ」 倉本智明編著『セクシュアリティの障害学』 明石書店：168-208
 ロバート・ソマー著、穂山貞登訳 (1972) 『人間の空間 デザインの行動的研究』 鹿島出版会